

チュチエ思想の具現としての朝鮮における

自立的民族経済の建設と発展

——再び私が見てきた朝鮮——

井 上 周 八

- 一、はじめに
- 二、人民経済のチュチエ化と当面の十大展望目標
- 三、チルゴル協同農場、テソン湖、クムソントラクター工場を訪ねて
- 四、社会主義経済建設においてチュチエ思想の果たす役割

一、はじめに

私は一昨年に引続き、一九八〇年八月十八日から二九日にかけて、朝鮮民主主義人民共和国を再度訪れ、金日成主席の生誕地万景台をはじめ、革命博物館、国際親善展覧館、中央歴史博物館、学生少年宮殿、地下鉄板門店、金星トラクター工場、チルゴル同農場などを見聞し、また、私たち訪朝団員六名は、チュチエ思想、教育、法律、交通の各分野の諸先生と学習・討論の時間をもつことができた。

チュチエ思想の具現としての朝鮮における自立的民族経済の建設と発展

その結果、かねてから支持してきた南北の自主的平和統一と南朝鮮の民主化闘争支持の必要を一層強く痛感し、八〇年代を通してこの問題にすこしでも役立ちたいと決意して帰国した。

現在、共和国は発展途上国であるが、しかしその建設成長ぶりは素晴らしいものがあり、また主席の人間を何よりも大切にすチュチュエ思想が、共和国の人たちによって、あらゆる方向、分野で具現化されている現実は、文字通り驚嘆すべきものがある。

これに反して、現在の南朝鮮社会のファッショ的「維新体制」の人民抑圧は極限に達し、最近の「光州虐殺蛮行」の実体と金大中裁判の動向は私たちの多く日本人に強い衝撃を与えている。⁽¹⁾

私はこのような状況のもとで、朝鮮統一のための金日成主席の三大原則（外部勢力に依存せずその干渉を拒否する、武力によらず平和的に統一を実現する、思想・理念や制度の相異を越えて民族的団結をはかる）と、労働党第六回大会報告の統一のための提案⁽²⁾を支持し、朝鮮南部のファッショ的⁽²⁾全斗煥の「維新体制」に反対し、南部人民の民主化闘争を支持すると同時に、金日成主席のチュチュエ思想を現代の新しい要求を、満たす最高の思想・理論として前進しつつある社会主義朝鮮の研究の必要を痛感した。

私たちは朝鮮半島の動向に特別な関心を持たなくてはならない。その理由は朝鮮が日本に一番近い隣国であり、日本の歴史に大きな文化的影響を与えてくれた国であるということからだけではなく、日本が今世紀の初頭から朝鮮を独占的な植民地として支配収奪し、第二次大戦後もアメリカと提携して朝鮮半島の分断固定化に協力し、そこから経済的・政治的利益を引き出している国だからである。

朝鮮半島は分断され、北と南に二つの異なった体制と思想が存在している。

南朝鮮は資本主義体制と世界経済に組み込まれ、長年の外資導入と、特にアメリカの軍事援助の下で、いわゆる「経済発展」なるものをついこの間まで続けていたが、その「発展」は、実は人民の犠牲によるものであった。

これとは正反対に、一九四八年から現在までの北の朝鮮民主主義人民共和国は、チュチェ思想の具現としての自立経済を基本とし、自国の人民の力と物資を総動員して建設を進め、他の社会主義国の歩んだ途を短期間で踏破し、「世界で最初に、輝しい共産主義社会を実現するのは朝鮮であろう」という評価を与えられるほどの偉大な成果を収めつつある。

しかも朝鮮は植民地主義と封建制の二重の搾取の下で資本主義的發展を正常に経過できなかったため、資本主義の下で当然解決しておくべきであった生産力發展の課題を解決しなければならなかったのであり、この困難な課題をチュチェ的に解決した共和国の経験は、第三世界の注目の的となっている。したがって国外国内の資本によって支配取奪されている南部と、チュチェ思想を唯一の指導指針として、民族的自立經濟の建設に成功し、人民の福祉を第一義とする朝鮮民主主義人民共和国との、この著しい対照から私たちは学ぶところが極めて大きい。

周知のように一九四五年八月十五日、第二次世界大戦は終了し、金日成將軍に導かれた十五星霜にわたる抗日武装闘争は勝利し、朝鮮人民は解放され、翌四六年二月八日、北朝鮮臨時人民委員会が樹立され、この新しい型の人民政權が反帝反封建の民主主義革命の課題を遂行したのである。

- (一) 一九八〇年五月二十七日午前三時半、南朝鮮光州で、降下部隊、正規軍、戦車隊その他約二万五千の兵力を行使し、全斗煥(国軍保官司令官、当時)は、朝鮮民族の歴史に消すことのできない同族の大虐殺を強行した。正確な数字は不明であるが、二千余名を殺し、一〇万以上の市民を負傷させ、数千人を逮捕、子供、女子、老人をもなぐり、刺し、射ち殺している。そのこ、全軍事政權は、金大中氏を内乱陰謀罪で軍法会議に起訴し、記者数千人、教員六百余人を追放、雑誌百七十二の発禁処分

という弾圧を加え、金鐘泌、金泳三らの大統領候補と目される政治家を追放して、みずから大統領に就任現在、南朝鮮の民主主義は窒息状態とみられるにいたった。

光州事件の背景にアメリカの安保最優先策があったことも、今日では明らかにされている。光州事件直後の六月一日、カーター大統領は「共產主義の侵略、転覆活動に対する安全保障は、人権尊重および民主主義の確立のための前提である」と通信社に語っており、同盟国や通商相手国の人権よりは、安保を重視していることを言明した。光州検問所にアメリカ人が一人ずつついていたことを文東煥韓国神学大学教授夫人も証言している。こうしてアメリカの民主主義とカーターの人権政策に対する不信が南朝鮮人民のあいだに次第に深まっているという。

日本政府もアメリカに同調しており、「政府は金大中氏救出に努力せよ」という声が、各方面から、広範に、強く叫ばれつつある。

(2) 第六回大会報告は五つの柱から構成されているが、その第三の柱「祖国の自主的平和的統一を実現しよう」は、朝鮮民族としての朝鮮半島におけるチュチュエの確立、チュチュエ思想の具現についての確信にみちた最新の指針の提示である。

主席は「われわれの世代に必ず祖国を統一しようとの確固不動の決意にもとづき、祖国統一のためのもつとも正確な路線と方針」をあらためて、ここで打ち出している。

朝鮮統一の問題は、朝鮮人民が外国帝国主義者に奪われた領土と人民を取り戻し、朝鮮半島における朝鮮民族のチュチュエを確立する問題である。その方法は、すでに一九七二年二月四日の「祖国統一の三大原則」で明示されているように、自主、平和統一、民族大団結による南北連邦制の実現である。

報告は、右の原則を更に展開している。すなわち、民主主義を志向する北と南の共通の政治理念をもつ高麗民主連邦共和国を提案し、この共和国は北と南の思想・制度の相異をみとめたうえで連邦国家であり、いかなる政治的、軍事的同盟やブロックにも加担しない中立国として次のような十大施政方針を実施すべきだとしている。

①自主性の堅持、自主的政策の実施、②民主主義の実施による民族の大団結、③北と南の交流による民族経済の自立的発展、④北と南の科学、文化、教育における統一的发展、⑤北と南の交通、通信の連結と自由な利用、⑥北と南の勤労大衆と全人民の生活安定と福祉の系統的増進、⑦北と南の軍事的対峙状態の解消、民族連合軍による外国侵略の防衛、⑧すべての在外国同胞の民族的権利と利益の擁護、⑨北と南の統一以前の対外関係の処理、対外活動の統一調整、⑩全民族を代表する統一国家として、平和愛好的対外政策の実施。

報告は前途にはまだ多くの障害と難関が横たわっているが、必ず統一を達成するだろう。そのとき「わが国は五千万の人口と輝かしい民族文化の威力ある民族経済を有する自主独立国家として、尊敬と権威を持って国際舞台に登場するであろうし、三千里の国土に、いっそう富強で、繁栄する人民の楽園を建設することになりましょう」と結んでいるが、私は無敵のチュチェ思想を指導方針としている以上、人民の楽園が必ずや建設されることは疑いの余地がないと確信する。それは主席が言明しているように、単に朝鮮半島においてだけでなく、全世界においてでもある。このような楽天的見通しをもつことのできる唯一の理由も、「あらゆるものを人間中心に考え、人間のために奉仕させる人間中心の世界観であり、勤労人民大衆の自主性を実現するための革命学説」であるチュチェ思想の生命力によるものである。

ところで朝鮮民主主義人民共和国がソ連の進出によって解放された国であり、解放直後の朝鮮人民によって全国的に組織された人民委員会はソビエトの路線を執行する道具としてつくられたものであるなどと単純に考えている人たちがいる。しかし人民委員会のいくつかはソ連の進出以前につくられていた。一九三二—三五年に土地改革と民主主義立法が満州国境沿いの豆満江流域で批准され、一九三〇年代にこの地域で武装闘争が展開されており、一九三五年以降は金日成將軍の率いる革命軍の主力部隊は鴨綠江沿岸に進出して、白頭山を遊撃根拠地とし、ここから政治工作員が各地方に送られた。祖国光復会はこの根拠地から生まれた。すなわち綿密な準備のもと、常設的な反日民族統一戦線組織として、一九三六年五月五日祖国光復会が創立され、金日成將軍が会長に推され、將軍の手になる祖国光復会の綱領、規約、創立宣言が内外に発表された。この一〇大綱領は一九四五年以降の諸改革の指針となったものであり、マルクス・レーニン主義を朝鮮の現実に創造的に適用した不滅の文献である。

綱領はまず、日本帝国主義の植民地支配を打倒し、真の人民政府を樹立する課題と、それを實現するための革命軍と広範な反日民族統一戦線の形成の必要を指摘し、一切の民主主義的自由と権利を實現すること、日本帝国主義と売

国的親日分子の土地生産手段の没収、土地改革と重要産業国有化、自立的民族経済の建設などの課題を提起している。この綱領には主席のチュチュエ思想が具体化されており、階級路線と大衆路線の結合した不朽の文献であるが、この綱領に示された課題は、現在の共和国においてすべて実現されているのである。

一九四五年一〇月一〇～一三日、平壤で党創立大会が開かれ、北朝鮮共産党の組織路線と政治路線が示されたが、主席はこの一三日の平壤市内各界代表主催の歓迎宴会で次のようにのべている。

「共産党は、労働者階級をはじめ、労働大衆の利益を徹底して擁護し、民主主義的な自主独立国家を建設するために闘争する労働者階級の戦斗的部隊であり、先鋒隊であります。

われわれ共産主義者には、勤労大衆の眞の利益としあわせのために闘争する以外に目的はなく、またありません。」一九四六年八月二八日、現在の朝鮮労働党が、北朝鮮共産党と、主として勤労大衆の小市民層を基盤とする新民党と合同して、勤労人民の唯一の前衛党として誕生した。これは勤労者の党が一つでないということは、統一と団結の強化を妨げ、敵の分裂策動を利することになる心配があることを見極めた主席の方針によるものであった。

一九四六年以降、歴史的な土地改革（四六年三月）、重要産業国有化（同年八月）、朝鮮人民軍創設（四八年二月）朝鮮民主主義人民共和国創建（四八年九月）、最初の人民経済發展計画としての二カ年計画（四九～五〇年）実施と共和国は自立的民族経済の土台づくりの歩みを進め、また南北朝鮮の平和的統一の努力を続けてきたが、一九五〇年六月二五日、アメリカ帝国主義と李承晩一味はついに共和国にたいし侵略戦争を行ってきた。

主席の「すべての力を戦争勝利のために」という呼びかけの下に、朝鮮人民の偉大な祖国解放戦争は三年間の苛烈な闘いを経て歴史的な勝利を収めた。しかし創建間もない共和国にとって戦争の被害は厳しいものであった。金漢吉

博士の『現代朝鮮史』（朝鮮・平壤、外文出版社、三六四ページ以下参照）によれば、戦争中アメリカは共和国に一平方キロメートル当たり平均一八個の爆弾を投下し、都市と農村で二八〇〇万平方メートルの住宅、五〇〇〇余の学校、一〇〇〇余の病院・診療所、二六〇余の劇場・映画館、数千の文化・厚生施設を破壊し、また、共和国の八七〇〇余の工場や企業所を徹底的に爆破し、このため一九五三年の工業生産は一九四九年の生産高の六四％に下落し、とくに電力は二六％、石炭は一一％、鉄は一〇％に減退した。また農業部門も二五％以上の農地が被害をうけ、戦時の農業生産高は七六％に下落した。停戦当時、共和国には一枚の煉瓦、一グラムのセメント、一片の鉄材すら生産する設備がないといわれ、人民経済の戦災総額は四二〇〇億円（旧貨幣）に達したといわれた。しかし人民と国土があり、党と人民政権がある限り、必ず社会主義建設は勝利するという主席の信念と陣頭指揮は全人民を再び奮起させた。

一九八〇年十月十日の朝鮮労働党第六回大会での金日成総書記の報告は、共和国が戦争の廃墟のなかからチュチェ思想を指導指針として立ち上り、その発展の輝かしい成果を全世界に宣言した歴史的演説である。六回大会報告は、朝鮮の革命と建設が歴史的な新段階に到達し、党の組織的思想的基礎が磐石のように固められ、不敗の威力をもつ指導力に発展し、共和国人民が革命の偉業を完成する確信にあふれながら、前人未踏の共産主義社会という樂園を目指して力強く歩みつつあることの全世界へ向っての宣言であった。

二、人民経済のチュチェ化と当面の十大展望目標

共和国の経済建設路線は、いうまでもなくチュチェ路線であり、人民経済のチュチェ化路線である。「全社会のチュチェ思想化は朝鮮革命の総体的任務」であることを六回大会の報告は改めて強調しているが、朝鮮社会主義の経済

建設についても、それがチュチュエ思想の具現として行なわれるところに、社会主義朝鮮の経済建設の特質があり、この特質があるからこそ「社会主義の模範国」として第三世界の多数の国の人民から、現在、共和国は注目されているのである。

ではチュチュエ思想とは何か。これについては主席がこれまでの半世紀に及ぶ革命活動のなかで繰り返し教えておられるが、第六回大会報告でも主席は「チュチュエ思想は、あらゆるものを人間中心に考え、人間のために奉仕させる人間中心の世界観であり、勤労人民大衆の自主性を実現するための革命学説であります」と要約し、続けて「チュチュエ思想を指導的指針とし、それを徹底的に具現してこそ、人間改造と社会改造、経済建設と文化建設で提起されるすべての問題を勤労人民大衆の自主的志向と要求にそくして解決することができ、共産主義の思想的要塞と物質的要塞を成功裏に占領することができます」とのべている。

チュチュエ思想とは、このように人間中心の、人間のための思想であり、人間のしあわせをのみ追求する哲学である。したがってチュチュエ思想の具現、その目標は共産主義社会の実現にほかならない。なぜなら「人民の福祉を系統的に増進させることは、わが党の活動の最高原則であります。われわれが社会主義共産主義を建設するためにたたかうのも、結局は、人民がいつそう豊かに、だれもが等しくしあわせに暮らせるようにすることにその目的がありま

す」(一九七〇年十一月二日、労働党第五回大会での報告)とのべられているように、すべての人間のしあわせのための社会、それが共産主義社会だからである。六回大会報告もこのことを「全社会をチュチュエ思想化するたたかいは、朝鮮で社会主義、共産主義を建設するためのたたかいであり、わが人民の自由と幸福を実現するためのたたかいでありま

す」とのべている。人民の幸福を阻む共産主義など何の意味もなく、また共産主義とはそもそも人民の幸福のための

ものにほかならない。このことを主席はまた一九六〇年八月二日、「全国千里馬作業班運動先駆者大会」でおこなった演説でも「共産主義は人類の理想であり、それは多くの人びとのためのものであり、すべて人びとをりっぱに暮らせるようにするためのものであります」とのべている。

右のことを六回大会報告は、全社会をチュチェ思想化することは、とりも直さず勤労人民大衆の自主性を完全に実現することであり、人民の自由と幸福を実現することであり、同時に全社会を革命化し、労働者階級化、インテリ化することであり、前人未踏の「能力にしたがって働き、需要に応じて受けとる」共産主義社会を実現することにほかならないと、あらためて明確にしている。

しかし共和国の現時点での当面の目標は、共産主義社会の実現ではなく、その前段階としての完全社会主義社会の建設である。すなわち一九八〇年代の経済建設の重要課題は、「完全に勝利した社会主義」にふさわしい物質的、技術的土台を築き、人民大衆の生活を画期的に向上させることである。

ところで「完全に勝利した社会主義」、「完全な社会主義社会」というのは、全社会のチュチェ思想化という共和国の究極の目標の前段階で達成すべき、共和国の当面のもっとも重要な目標であるが、完全な社会主義社会は労働者階級と農民との階級的差異がなくなり、中産階層、とくに農民大衆が社会主義を積極的に支持するようになり、また重労働と軽労働の差や女性の家事の負担からの解放が現実化したとき実現する。そのときは生産力がすくなくとも発達した資本主義諸国で農村を資本主義化した程度に技術革命を行なって、農業の機械化、化学化、水利化を実施し、農村でも八時間労働が実行されなくてはならない。このため主席は第六回大会で社会主義経済建設の十大展望目標を掲げ、これを実現しなければならぬとしている。「われわれは、人民経済の全部門で生産を早いテンポで成長さ

せ、近い将来、年間千億キロワット／時の電力、一億二千万トンの石炭、千五百万トンの鋼鉄、百五十万トンの非鉄金属、二千万トンのセメント、七百万トンの化学肥料、十五億メートルの織物、五百万トンの水産物、千五百万トンの穀物を生産し、こんご十年間に三十万ヘクタールの干拓地を開墾しなければなりません」という指示がこれである。そしてこの目標を達成するならば、一九八〇年代末に工業総生産高は現在の三・一倍に、一九四六年に比べれば、実に千倍に増大し、一九四六年の年間工業生産高をわずか八時間で生産するようになり、社会主義の完全勝利をめざす朝鮮人民の闘争は決定的な勝利を収めることになる、誇らかに宣言している。

一九八〇年十一月一〇日の『朝鮮時報』は「この目標が達成されると朝鮮の経済は産業革命から一、二世紀を経た歴史を持つ世界の先進工業国の仲間入りをするようになる。」として表1から6を掲げ、以下のようにのべている。

十大展望目標は表1のように六ヶ年計画実績の二、三倍、第二次七ヶ年計画の五、六割増に相当するぼう大な経済計画である。停滞をつづける西側経済から見ると想像をこえる高い目標といえよう。

この背景には原料、エネルギーの自給率が七〇パーセントを越えるという徹底した自立経済の豊かな潜在力、豊富な資源、七〇年代に入って目を見張る発展をつづけている科学技術の成果、経済幹部の広いすそ野などがあげられる。

展望目標はまず採掘工業の発展が前提条件となる。とりわけ共和国の原料、エネルギー資源の石炭一億二千万トン採掘の見通しは明るい。共和国の石炭埋蔵量は推定百四十億トン。近年大規模炭鉱の開発、改造が順調に進んでおり、技術革命の推進にもなつて生産目標の達成は疑いない。

一千億キロワット時の電力生産目標は火力と水力がほぼ一対一という均衡のとれた条件のもとで、西海岸の潮力発

表1 主要工業製品の生産推移

		6カ年計画 実績(75年)	第2次7カ年 計画(84年)	10大展望 目標
電	力	280億kWh	580~600	1,000
石	炭	5,000万トン	7,000~8,000	12,000
鋼	鉄	400万トン	740~800	1,500
非	鉄	—	100万トン	150
セ	メント	800万トン	1,200~1,300	2,000
化	学肥料	300万トン	500	700
織	物	—	—	15億メートル
水	産物	160万トン	350	500
穀	物	700万トン	1,000	1,500
干	拓地	3万ha	10	30

表2 1人当り生産高の各国との比較

		単位	朝鮮	日本	西独	仏	英国
電	力	kw時	5,556	4,538	5,425	3,677	4,952
石	炭	kg	6,667	163	1,559	440	221
鋼	鉄	kg	833	952	689	438	398
セ	メント	kg	1,111	609	555	557	398
水	産物	kg	277	94	7	15	19
穀	物	kg	833	—	—	—	—

共和国の数字は10大目標として発表された主要工業製品の生産量をもとに人口1,800万人として推算。各国は朝日年鑑1979年による。

電所、電子力発電所の操業開始も予定されており、その展望は明るい。

重工業の骨幹である金属工業でも、すでに国産炭によるコークス生産という画期的な技術上の問題が解決されたも
とで、鋼鉄千五百万トンの生産目標は十分に達成可能である。セメント生産二千万トンという高い目標は、東洋一を
誇る年産三百万トンの順川セメント工場を中心にして豊富な資源を活用した各地の中小企業所の生産拡張とあわせて

チュチェ思想の具現としての朝鮮における自立的民族経済の建設と発展

表3 工業生産の年度別成長率

年 度	成長率 (%)
1947—49	49.9
1954—56	41.7
1957—60	36.6
1961—70	12.8
1970—79	15.9

表4 工業生産の成長

	工 業 総生産額	生産手段	消費材
1946—60	21倍	23倍	20倍
1960—70	3.3倍	3.7倍	2.8倍
1970—79	3.8倍	3.9倍	3.7倍

表5 穀物増産の推移

年 度	穀物生産量	指 数
1946	189万トン	100
1960	389	201
1970	500	265
1979	900	476

表6 国別米穀(もみ)の
ha当たり収量(トン)

朝 鮮	7.2	ベトナム	2.02
南 朝 鮮	6.55	フィリピン	1.84
日 本	6.25	米 国	5.05
中 国	3.53	ソ 連	3.62
インドネシア	2.92	イタリヤ	5.00

注 朝鮮は79年実績
他国はFAO生産78より

その前途に大きな期待が寄せられている。

十大展望目標の中でもっとも意欲的なものは千五百万トンの穀物生産目標である。この高い目標を設定した背景には表5でもみられるようにきわめて順調な農業発展がなすとげられ、安定した農業生産が保たれていることがある。

朝鮮は社会主義のアキレス腱とよばれた農業で成功を収め、最高水準の農法を生み出した。一九七九年の一ヘクタール当たりの米(もみ)収量は七・二トンで表6のように堂々世界一位である。米作に適さない寒冷地で、しかも国土の八〇パーセントが山地という不利な条件を克服したのは、独自の農業技術革命が推進された結果によるところが大

きい。とくに水利化は百ヘクタール当たりの灌漑面積が十年前で三十一ヘクタールという世界最高水準に到達し、現在は地下水を利用した二重、三重の水対策が展開されている。電化も二十年前に完成した。機械化もトラクター台数は百ヘクタール当たり平野は七台、中間、山間地帯は六台となった。科学化に至っては昨年の田畑ヘクタール当たりの化学肥料の施肥量は一・五トンに達し、化学的方法による水田の除草は水田総面積の九七パーセントに達している。ちなみに日本のばあいヘクタール当たり七百七十二グラム（一九七二年）と停滞している（日本農林省『肥料要覧』一九七五年版）。

こうした成果にもとづいて今後朝鮮農村では百ヘクタール当たり十〜十二台のトラクターが送り込まれ、土壌と作物に適した化学肥料が供給される。こうして農業生産が千五百万トンに高まると協同農業でも工場と同じく八時間労働制が実施できるようになる。

そして「以上概略的にみた十大展望目標は、徹底した主体化、現代化、科学化の方針によって遂行されよう。これは一口にいうと、自己の力と技術と資源によって経済建設をやりぬくことを意味する。」とし、この十大展望目標が達成されるなら「表2のように、本紙の試算によれば一人当たり主要工業生産量は世界第二位といわれる日本を堂々とおさえ、西欧諸国を圧倒的に引き離している。また、国内的に見ても、三十六年間の植民地支配から解放され、ゼロからスタートした社会主義経済建設は十大展望目標が達成されることによって、わずか半世紀足らずで完全に勝利した社会主義社会の物質的・技術的土台をきざくことになろう。」とのべている。

次で「朝鮮経済の順調な発展は表3、表4からもはっきり裏づけられているが、ここでは七〇年代の経済発展について各国のそれと比較しながら論じてみよう。」として以下のようにのべている。

朝鮮において工業生産は一九七〇年～一九七九年の間年一五・九パーセントの高い成長率を誇っている。同期間、西側先進国の工業成長率は米国二・〇パーセント（七〇～七六年）、英国〇・八パーセント（七〇～七六年）、日本四パーセント（一九七七年）と低調である。発展途上国は七・二パーセント（一九七〇～七七年）である（数字は世界経済白書一九七八年版より）。

世界的な経済危機がしのびよっている中で達成された一九七〇年代の驚異的な工業発展を背景に打ち出された八〇年代のこの壮大な経済建設目標は、十分実現しうるであろう。十大展望目標が高く掲げられた現時点から、共和国のこれまでの経済建設の歩みをみると、その発展のテンポの速さが、まさに千里馬の勢いであることを改めて知ることができよう。

一九四五年八月十五日、第二次世界大戦は終了し、朝鮮人民の抗日武装闘争は勝利し、十月十日に朝鮮共産党が創設され、翌年二月八日に北朝鮮臨時人民委員会が樹立されて、三月に早くも歴史的な土地改革法令を公布し、別表のような地主の土地一〇〇万ヘクタールを没収して七二万余戸の農民に無償分配し、六月には重要産業を国有化し、一〇〇余の産業企業所を国家が掌握した。そして一九四七年二月、北朝鮮で過渡期の課題を遂行する最初のプロレタリアート独裁政権である北朝鮮人民委員会が樹立され、翌四八年二月には朝鮮人民軍が創建され、九月九日には朝鮮民主主義人民共和国（金日成主席）が誕生した。かくして一九四九～五〇年の二カ年にわたる人民経済発展計画がつくられ、これを五〇年上半年期に基本的に完遂し、自立的民族経済の土台づくりを行ったのである。

公式発表によれば共和国建国の翌年の一九四九年の生産力水準は、鉄鋼一四万四〇〇〇トン、電力五九億二四〇〇万キロワット／時、石炭四〇〇万トン、化学肥料四〇万トンという低さであった。こうした低水準から出発して、こ

土地改革による没収地と分配の状況

(1,000ha) (1,000戸)

没収した土地			分配した土地				
対 象	面 積		対 象	面 積		戸 数	
	実数	%		数実	%	実数	%
日本国家および日本人所有地	112.6	11.2	雇 農	22.4	2.3	17.1	2.4
民族反逆者および逃亡者の土地	13.3	1.3	土地をもたない農民	603.4	61.5	443.0	61.1
5 ha以上の地主の土地	237.7	23.8	土地をわずかしかもたない農民	346.0	35.2	260.5	36.0
所有地を全部小作にだしている土地	263.7	26.3	土地を没収して他の地方に移住させられた地主	9.6	1.0	3.9	0.5
ひきつづき小作にだしている者の土地	358.1	35.8	計	981.4	100.0	724.5	100.0
聖堂・僧院・宗教団体の土地	15.3	1.5	国家管理のため人民委員会に保有させた土地	18.9			
計	1,000.3	100.0					

注) 『1946—60年, 朝鮮民主主義人民共和国人民経済発展統計集』, 59頁, (『わが国における土地改革の歴史的経験』, 所収) より和田一雄教授が作表。

チュチェ思想の具現としての朝鮮における自立的民族経済の建設と発展

れから自立的民族経済を建設しようとしたま
さにそのとき、アメリカ帝国主義との祖国解
放戦争(朝鮮戦争)を一九五〇年六月二五日か
ら五三年七月二七日の間に行なわなくてはな
らず、共和国の人民軍は創建後わずか二年で
アメリカ侵略軍と戦い、共和国を守り抜いた
のであるが、そのこの経済発展の過程は次の
通りである。

人民経済復興発展三カ年計画(一九五四—五
六年)。戦後の極度の困難な情況下で、重工
業の優先的な復興発展を保障しながら、同時
に軽工業と農業を發展させることを目指した
復興建設の時期であり、有名な千里馬運動も
開始された。この運動は単なる増産運動では
なく、生産における集団的革新運動であり、
勤労人民大衆を生産と経営の主人として、そ
のエネルギーを全面的に發揮する運動であっ

た。この三カ年計画のなかで、農業の集団化を進め、工業でも鉄道運輸や、教育・文化施設を再建、新設した。共和国の経済建設はチュチェ思想の具現としての自力更生路線であるが、朝鮮戦争停戦直後のこの期には、社会主義諸国からの援助があった。すなわち「朝ソコミニケ（五三年九月）によってソ連から一〇億ルーブル、朝中コミニケ（五三年一月）によって中国から八億元、このほか人民民主主義諸国からも無償援助があった。これらの総額は、五年の国家予算の三三・六%、五五年二・二%、五六年一四・八%にたっし、経済の復興に役立った（『朝鮮中央年鑑』一九五七年）。しかし、こうした時に内外の修正主義者、大国主義者は共和国の自主・自立路線に反対したのである。』（『社会主義朝鮮の経済』二月社刊三六〇頁。）

(3) 戦後の経済建設の朝鮮の独自の発展モデルについて、エレン・ブルン、ジャック・ヘルシュ共著『朝鮮社会主義経済史』（佐藤明訳、ありえず書房、一九八〇年六月、七二ページ以下参照）は次のようにのべている。

朝鮮の戦略は重工業に重点を置くことでは経済発展に関する初期のオードックスなソ連型と類似している。しかし、このモデルと異なる点は、それと同時に、軽工業と農業に精一杯の注意を払うということである。

この路線は朝鮮の特殊な情勢の論理的帰結であり、かつ、この問題に関する指導部の考えの具体化であって、すでに経済発展に関する休戦前の定式化に示されているものと同じものである。しかし、この同時建設は、国内の党員からも外国の友党からも、反対された。反対の点は、人民の食糧その他の物資の深刻な不足に直面している時に、重工業の建設に重点を置きすぎるということにあった。

ピョンヤン社会科学学院経済研究所のキム・ヨンジュとシン・チョエホアはわれわれと議論したとき、その問題の要点をつぎのように説明した。

「党が（重工業の建設と軽工業・農業の同時発展という）この路線を設定したとき党内の分派はこれに反対した。外国の人たちのなかにもわが党の政策を妨害する者がいた。この分派は重工業に重点を置きすぎるといい、『機械でどうして米を作れるのか』と質問した。換言すれば、彼らは総ての資源と外国の援助を『食って』しばらくのあいだ良い生活をし、そのあと

なにもなくなってもよいと思っただけである。わが党は重工業を優先しなくては人民の生活を安定させることができず、国防力も弱くなるし、自立的民族経済の基礎を築くこともできないという理由で、この分派の要求を拒否した。事実として、機械は米を作ることができるのである。重工業は、農業と軽工業の発展の基礎である。より多くの農業用機械を作れば、より多くの米が作れる。より多くの建築資材を作れば、より多くの家が建てられる。

もしわれわれが製造工業を優先させなかったならば、われわれは鉱石を売り、それと交換に完成品を高い価格で買わざるを得なくなっていたであろう。結果は、まったくの経済的損失である。このような関係になれば、経済的後進諸国は鉱山業に執着し、高価な加工品を買わざるをえなくなるのである。これこそ、その諸国を後進状態につなぎ止める過程なのである。」

だから朝鮮の経済学者がみているように、朝鮮のような国にとっては国際商業における貿易の不均衡を克服する方法は、自立民族経済の建設による以外にはない。もしこのような推論から出た路線が社会主義陣営の一国に適するものであるならば、これが第三世界諸国にいつそうよく当てはまるのは間違いないところである。

人民経済五カ年計画（一九五七―六一年）。自主・自立路線による最初の長期経済計画ともいえるこの期間は、三カ年計画に引き続き重工業を優先しながら、軽工業と農業の同時発展をはかることと、都市と農村における生産関係を社会主義的に改造することを課題とした。五カ年計画期間に堅持された基本路線は、重工業の優先的發展を保障することであったが、近藤康男教授はこの点について次のようにのべている。

「それは重工業を優先させながらも、重工業のための重工業ではなく軽工業と農業の同時発展に役立つ、そのような重工業の発展に重点をおいたことである。たとえば農業機械、化学肥料、農業、紡績機械、化学繊維などの生産部門に大きな力がかたむけられた。金属工業と機械工業の急速な発展も結局は軽工業と農業の発展を促す重要な役割をはたした。『機械からめしは出てこない』と言って党に挑んだ分派分子の詭弁を金日成主席は粉碎して、もっぱら自国の強力な重工業にもとづいてのみ農業を確固と発展させることができるという主体的な道を明示したのであった。

人民経済五カ年計画が遂行された時期は、農業の社会主義的協同化が完成した時期であり、手工業者や商人もすべて協同経営に加わって社会主義計画経済につくすよう改造された時期であった。」（近藤康男「社会主義農村問題に関するテーゼとその完全実現のための諸問題」、『チュチュエ思想研究』一九八〇年十月号所載、六九ページ）

そして教授は表Aを掲げて「この時期に共和国の階級構成には質的变化がおこり、表に見るとおり、一九六〇年代初期、共和国の階級および階層別構成は、労働者、協同農場員および事務員などの社会主義的勤労者に単純化した」（同上）と指摘している。

農業協同化の進行状況は表Bの示す通りである。さきにも述べた土地改革の完了とともに、朝鮮の社会主義建設と農業に決定的な役割を果たしたのが農業の協同化であったが、農業の協同化は朝鮮戦争のさなかから開始されており、この期にはいって農業の水利化、電化とともに、その基本をほぼ完了したのである。

このような成果をあげたこの期は、したがって社会主義工業化の基礎を築いた第一段階として位置づけられる。

表A 共和国人口の階級構成 (%)

	1949年	1963年
労働者	19.0	40.1
協同農場員	—	42.8
事務員	6.2	15.1
その他協同員 組合員	—	1.9
個人農	74.1	—
手工業者	1.5	—
企業家	0.2	—
商人	0.3	—

工業生産は、この期間、毎年三六・六％という飛躍的な発展を記録し、五カ年計画の当初目標である工業生産額を二・六倍に高める予定を二年半で完全に達成し、一九五七～六〇年の四年間に工業総生産高は三・五倍に高まり、穀物の生産は三二％も増大、国民所得は二・一倍に、労働者、事務員の実質賃金は二・一倍となった。また農民の生活は、全般的に中農または富裕な中農の水準に達し、人民生活の衣食住問題は基本的に解決された。

表B 農業協同化の進行状況

(%)

		1953年	'54	'55	'56	'57	'58
協同化率	農家	1.2	31.8	49.0	80.9	95.6	100.0
	面積	0.6	30.9	48.6	77.9	93.7	100.0

注)『わが国における農業共同化の歴史的経験』, チョンソン・ピョンヤン, 外国文出版社, 1975年, 99頁

第一次七カ年計画(一九六一〜六七)年。勝利をおさめた社会主義制度に依拠して全面的な技術改革と文化革命を遂行し、社会主義工業化を実現するとともに人民生活の向上をはかることを基本的課題としたこの時期に、人民経済にたいする国家の指導と企業の実行運営を改善、強化する方針が実施された。その出発点は一九六〇年二月の主席による青山里現地指導である。青山里精神、青山里方法とよばれる人民経済にたいする指導・管理方式は革命は、人民のための事業であり、人民自身の事業であります。人民大衆のために忠実に奉仕し、大衆のなかにはいって大衆を教育し、改造して団結させ、大衆から力と知恵をくみとり、広範な大衆を動員して革命の任務を遂行することは、わが党の一貫した大衆路線であります」という主席の革命的大衆路線の具体化であり、工業における新しい社会主義的経済管理体制である大安の事業体系と、農業における郡協同農場経営委員会を中心とする指導体系および国民経済の一元化と細分化体系のもとに、七カ年計画の課題遂行に向って全人民が組織、動員された。とくに従来の支配人単独責任制の下での官僚主義と形式主義の一掃、上部が下部をたすける気風、政治的思想活動の重視は、共産主義的企業管理の理想へと大きく前進したものであった。

第六回大会報告でも主席は、「人民経済のすべての部門で大安の事業体系をさらに貫徹しなければなりません。経済指導家は計画の一元化、細分化をさらににっばに実現し、資材の供給事業と協同生産組織を改善し、労働組織と設備管理をりっばに行ない、生産指導を責任

をもってしなければなりません。人民経済のすべての部門、すべての単位で乱費現象に反対し、節約闘争を強化し、同じ資材、設備、労力を用いてより多く生産し、国家経済をもっと着実に築かなければなりません。」とのべるとともに次のような重要な指摘を行なっている。

「党組織は経済活動を力強く推し進め、経済部門の働き手たちを積極的に押し立て、しっかり助けなければなりません。党組織は経済部門の働き手が革命の主人公にふさわしい態度をもって、大安の事業体系を貫徹し、経済組織活動と生産指揮を責任をもって行なうよう、導くべきであります。

党組織は、経済部門の働き手の中に表われているなわばり主義に反対し、たたかわなければなりません。現在、経済部門の働き手の中で、なわばり主義が濃厚に表われており、それは社会主義経済建設に少なからぬ支障を与えています。なわばり主義は個人主義の変種であり、功名主義の一表現形態であります。なわばり主義を犯す人は、自分の名誉と出世のために働く功名主義者であります。」

なお七カ年計画は、アメリカ帝国主義の侵略策動にともなう国際情勢の緊張、これに伴う共和国の国防建設、ならびに自立経済体制確立の強化のため、計画期間が三カ年延長された。

しかし社会主義工業化の課題は、技術改造の第一段階であった五カ年計画と全面的な技術改造の段階である第一次七カ年計画によって完遂され、この一九五七～七〇年の工業化期間中の年平均成長率は一九・一％という驚異的な発展テンポを実現し、自立的民族経済の建力な土台を構築することに成功したのである。

六カ年計画（一九七一～七六年）。一九七〇年十一月に開かれた朝鮮労働党第五回大会は七カ年計画期間に社会主義経済建設で収めた成果を踏えて六カ年計画を打ち出した。六〇年代に達成された共和国の社会主義工業化を基礎とし

て、思想革命、技術革命、文化革命の三大革命の旗を高く掲げ、人民経済のすべての部門で勤労者を骨の折れる労働から解放し、とくに重労働と軽労働の差異をちぢめ、女性を家事労働からの解放することを目指したこの期間は、社会主義の完全な勝利のための、技術革命の一層の発展時期であった。

労働党第六回大会報告は、技術革命が力強く推進された結果、第五回大会が提起した人民経済発展六カ年計画を工業総生産で一年四カ月くり上げて完遂し、六カ年計画の穀物生産目標を二年もくり上げて達成し、この成果によって第二次七カ年計画遂行を非常に速いテンポで進んでいるとのべている。

この六カ年計画当時の経済成長率は年一六・二％であり、その主要な成果としての経済指標を挙げると、電力二八〇億キロワット／時、石炭五三〇〇万トン、鉄鋼四〇〇万トン、セメント八〇〇万トン、穀物八〇〇万トン、化学肥料三〇〇万トン、繊維六億メートル、水産物一六〇万トンであり、戦前の一九四四年度の工業生産物を五日間で生産できる段階になった。また機械工業の占める割合は、戦前わずか五・一％であったのに、六カ年計画の結果、三三・七％を占めるようになり、生産は一九七〇年の二・二倍に増加した。

第二次七カ年計画（一九七八～八四年）。この期の基本的課題は人民経済のチュチェ化、現代化、科学化を推進して、社会主義経済の土台を一層強化し、人民生活をいちだんと向上させることであった。

人民経済のチュチェ化とは、自国の資源と技術に依拠して自国の実状にかなった経済を建設し発展させることであり、人民経済の現代化とは、立ち後れた技術を進んだ技術に改造して人民経済の技術装備水準を高めることであり、人民経済の科学化とは、科学・技術を発展させて各部門の生産と経営活動を新たな科学的土台のうえに引き上げることである。この計画期間の終わりには、年間五六〇億～六〇〇億キロワット／時の電力、七〇〇〇万～八〇〇〇万ト

ンの石炭、七四〇万トンの鉄鋼、五六〇万トンの圧延鋼材、一〇〇万トンの非鉄金属、五〇〇万トンの機械加工品、五〇〇万トンの化学肥料、一二〇〇万トンのセメント、八億メートルの織物、三五〇万トンの水産物、一〇〇〇万トンの穀物などの生産目標を実現することになり、この計画期間の完了とともに、生産手段の生産高は二・二倍、消費手段は二・一倍となり、共和国の工業生産の平均成長率は一二・一％という高水準を維持することになる。さらにこの計画期間を経て、国民所得も一・九倍に増加し、都市と農村に二〇万から三〇万世帯の現代的住宅を建設し、各道庁所在地をはじめとするセントラル・ヒーティングが施工される予定である。

すでに三年分の課題が一九八〇年九月末に完遂されたことを、六回大会報告は指摘しているが、同報告は、一九七〇年～一九七九年の間に共和国の工業生産が毎年一五・九％のテンポで成長し、工業総生産高は三・八倍に増大し、そのうち生産手段生産は三・九倍、消費財生産は三・七倍に増大したことも明かにしている。したがって現在の第二次七カ年計画の期限前遂行は疑いなく、共和国は勝利者の大きな栄誉と誇りをもって、社会主義経済建設の十大展望目標の実現に、第六回大会を契機として新たな前進を開始したのである。

朝鮮労働党第五回大会から今回の第六回大会にいたるこの十年間の共和国の実現した画期的成果としては、世界初の税金制度の完全廃止、十一年制義務教育、医療費の完全無料化、農村のバス化、水道化、農村診療所の病院化などがあり、こうして現在、食料も極めて低廉であり、住宅費も給料の二～三％程度であり、前述のように全都市に地域集中暖房が導入されるのも遠いことではない。

朝鮮が植民地と封建制の二重の搾取によって、資本主義発展のコースを経ることがなかったため、資本主義のもとで、前提的に解決される筈の生産力発展の課題を解決しなければならなかったこと、および朝鮮戦争でほとんど廃墟

と化したところから出発して、十大展望目標を掲げるまでにいたった成功の経験をみると、共和国が、帝国主義の植民地的抑圧から解放された第三世界の諸国によって、発展途上国に社会主義への道を示す模範国とみられるのは当然のことであろう。

しかもこのような成果がチュチェ思想の具現としての自立更生の道によって達成されたことが重要な意義をもつ点である。共和国創建三〇周年の祝宴で主席は「国の自主性は、自立的民族経済によって保証されねばなりません。強力な自立的民族経済なしには、その主権も行使できませんし、また、思いどおり発言し、行動することもできません」と教えているが、発展途上国の共通して直面せざるを得ない問題は、どのようにして自立的民族経済を確立するか、ということであり、社会制度の差を超えて、第三世界が、支配権を維持し拡張しようとする列強の策動からどのようにして自主権を守り抜くかの問題であり、共和国がこの問題に対する正しい解答を与えていることは間違いない。

三、チルゴル協会農場、テソン湖、クムソントラクッター工場を訪ねて

前回（一九七九年三月～四月）は竜林里協同農場、降仙製鋼所、ソフン湖、ヨンブン湖などを見聞したが、今回（一九八〇年八月）も希望して農場、工場、灌漑施設をみせて頂いた。

(1) チルゴル協同農場

一九八〇年八月二八日平壤市万景台区域チルゴル協同農場を訪ねた。チルゴルは金日成主席の母カン・パンソク女史生誕の地として知られている。私たちは管理委員長チョー・ハンソンさんをはじめ副管理委員長らの皆さんから、

チュチェ思想の具現としての朝鮮における自立的民族経済の建設と発展

「農場で生産した果物ですが一緒にあげましょう」と暖かく迎えられ、「私たちはチュチェ思想国際研究所代表団の皆さんがわが国を訪問されていることを新聞で知っておりましたが、そのうえ当農場を見学にこられありがたく思います。当農場の状況をお知らせしましょう」として次のような説明と挨拶を受けた。

当地は祖国の独立と女性解放のために一生を捧げたカン・パンソク女史が生れ育った所です。戦後復興建設期の一九五四年、当農場は主席によって組織され、そのご十四回にわたる現地指導により發展してきました。当初、まともな農機具もなく、何頭かの牛、牛車、鋤などで組織しました。しかし主席の配慮により、水利化が行なわれ、今では大干旱でも安定した收穫をあげております。

当農場には作業班が十二あり、技師が十八人、技手が九十五人、トラクターが一〇〇町歩あたり六台、トラックが一〇〇町歩あたり二・五台、その他六十余種の農機具を所有しており、これら農機具の約半分は主席の配慮により国家から送られたものです。当農場は二重の千里馬の称号と、桂冠近衛協同農場と三大革命赤旗協同農場の称号をもっております。

稲作は、チュチェ農法の結果、一町歩あたり八トン、とうもろこしも八トン以上をあげております。また「農村テーゼ」の具現によって、医療や住宅その他の配慮をうけております。

近い将来、田、畑で一町歩あたり一〇トン以上を目指し、全国で一〇〇万トン以上の穀物高地を占領しなければなりません。

現在、私たちは日本人始め世界の人民の支持と連帯のもとに、南からアメリカ帝国主義を追い出し、朝鮮の自主的統一を成し遂げなければならないと決意しております。最後に私はチルゴル協同農場の名で、朝鮮の統一を支持し

て下さる先生方と日本人民に謝意を表し、両国人民の団結が益々強くなることを願って挨拶を終わります。

次で私たちは管理委員長と副委員長の案内をうけ、農場内の諸施設——金日成同志革命思想研究室、文化会館、国営商店、托児所、幼稚園、農場員住宅など——を見学しながら種々の説明をうけた。その要点をのべると以下のような事柄である。

チルゴル協同農場は戸数三四〇戸（共和国の協同農場の平均的規模は約三〇〇戸）、耕地面積七〇〇ヘクタール（田が四〇〇、畠が二〇〇、果樹園が一〇〇ヘクタール）である（同上、五〇〇ヘクタール）。畑は野菜とともうもろこしが半々である。農場員は六〇一名であり、委員長の説明にあったように作業班（部落単位につくられる）は十二であるが、班は六〇〜一〇〇名で構成されており、農業作業班、工芸作業班、野菜作業班があり、畜産作業班（もしくは畜産所）、養蚕作業班、建設作業班などがある。そして班の下には三〜五の分組があり、分組は二〇名前後で構成されている。

協同農場員はどのような方法で分配を行なっているのか。分配方法は分組管理体制と作業班優待制の二つが組み合わされている。

分組管理体制とは、分組ごとのヘクタール当たりの収穫基準を定め、ノルマの遂行状況によって分組員たちの労働日数の評価し、分配を行なう制度である。分組管理体制は農民の集団生活を強化し、分組を集団生活の一単位として機能させるうえで役立っている。

作業班優待制とは社会主義的分配の原則に依拠しながら、農場員の生産意欲をよりあげるための積極的対策である。すなわちよく働き、ノルマ以上の成果をあげた作業班は、計画を超過実行した分に応じて余分に分配をうける制度である。これによって、労働にたいする政治的、道徳的刺激という基本に依拠しながら、そのうえに物質的経済的刺激

を結びつけて生産を増大させようとするものであって、工業管理における作業班点教制と同じ趣旨の制度である。

しかし、当初は協同農場は平均分配の方法をとっていたのであり、これがうまくゆかなかったため、現在の分組仕事高払い制を実施し、分組、作業班がそれぞれの農作業をうまくやった具合によって分配がなされるように改善したのである。

中国の大塞では個人単位で分配し、この人は一〇点、あの人は八点という具合にしたが、これでは他人の仕事を監視したり、スパイまで行なうことになり、他方自己申告をするというような矛盾も生まれたのであるが、朝鮮の協同農場では、この欠点を避けて、個人ではなく分組単位に分配を行ない、そして仕事の種類別に仕事の定量を決めたのである。

分組内の分配で各人は同じ収入を手にするのかという点は、前もって定められていない。作業員は一箇所で働く場合もあり、分散してバラバラで仕事する場合もある。そこで各人の労働についての評価組が、三〜五人でつくられている。この評価員の労働の評価は大衆が行なう。こうして評価された各人の点数は分組長が記入し、掲示板でこれを公開する。評価員の任命は、分組内での選挙によるが、その任期は一年で再選は妨げない。分組は一つの家族のようになり、住宅も分組ごとに集まっている。結婚や不幸のあった場合も、分組が家族のようにその世話をする。分配についての評価は毎日毎日行なうので不満はない。

昔は農村が暮しくいので都会へ出ていったが、今日では、都市の勤労者より協同農場員の暮しがよくなったと考えられるまでになったので、農村に留まりたがっている人の方が多い。今では農業の機械化が進み、田園の自然環境もよいので、農民もあえて都会に出てゆくとはしない。

収入は年間一戸当り約四〇〇〇ウオンで、現物で八トンの穀物（生産物の約二〇％が協同農場分で分配される）と現金で一六〇〇ウオンである。米は国家が農民から一キロ六〇チョンで購入し、消費者に僅か八チョンで売る。農民の月の平均生活費は一二〇ウオンである。尚一戸は四〜五名の家族から構成されている。

一九八〇年度の決算分配（「朝鮮通信」一九八〇年十一月二日号所報）で当農場は、一世帯平均八二四四キロの穀物と二三〇五ウオンの現金を分配、今年度の穀物生産計画を一一〇・八％超過遂行し、野菜、果物、蚕のまゆなども計画をはるかに越えて生産した。

なお「朝鮮通信」（同上）は「各地の協同農場で決算分配」という見出しで、平壤市万景台区域万景台協同農場が十一月十一日、一世帯平均七千三百八十キロの穀物と四千五百四十五ウオンの現金を分配したことを報じ次のように述べている。「今年最高の収穫をあげた同農場では、昨年に比べ一ヘクタール当たり米は二百八十四キロ、トウモロコシは二千六百七十キロ増収し、今年度計画を穀物は一〇五・九％、野菜は一二一・八％、肉は一〇六・五％、果物は一〇一・二％で超過遂行した。今年も前例にない大豊作を迎えた七号農場では十一月十五日、一世帯平均一万二千三百キロの穀物と多額の現金を分配した。同農場では最高収穫年度だった昨年よりもさらに、一ヘクタール当たり米五百キロ、トウモロコシ三千四百キロを増収し、今年度の農業生産計画を穀物は一二〇・五％、野菜は一二五％、果物は一三三％、肉は一五四％で超過遂行した。同農場は昨年より豊作で、一世帯平均一万七七百キロの穀物と多額の現金を分配した。」

現在の協同農場は協同組合的所有から全人民的所有への移行形態であり、六回大会でも、とくに協同農場の全人民所有への移行の問題が提起された。⁽⁴⁾

(4) 「協同的所有を全人民所有に発展させることは、農民を労働者階級化するうえで提起される非常に重要な問題」であると
して第六回大会報告は次のようにのべている。

すべての社会関係の基礎は生産手段に対する所有関係であり、あらゆる階級的差異は生産手段に対する所有関係によって規定されます。労働者階級と農民の階級的差異をなくし、すべての社会関係を労働者階級の姿どおりに完全に改造するためには、必ず協同的所有を全人民的所有に発展させ、生産手段に対する全人民的所有の唯一の支配を確立しなければなりません。

協同的所有を全人民的所有に移行させることは、こんにちわが革命発展の成熟した課題となっています。社会主義制度が樹立された後、農村では思想革命、技術革命、文化革命が力強く推進されて、農業の物質的、技術的土台が比べようもなく強固になり、農民の思想意識水準と技術文化水準が非常に高まりました。われわれはすでに達成した成果にもとづいて社会主義農村建設をさらに力強く推し進めることによって、協同的所有の全人民的所有への移行を成功裏に実現しなければなりません。

協同的所有を全人民的所有に移行させる事業は、農業協同化運動にも劣らぬ大きなできごとであり、非常に困難で複雑な社会経済的変革であります。したがってわれわれは、協同的所有を全人民的所有に移行させる事業を、一定の試験段階を経て、経験を積みながら、漸次的方法で推進しなければなりません。

(2) テソン湖

共和国農業の特質の第一は、徹底した水利体系の完備であり、ダム、貯水池、井戸などの施設によって現在、共和国は二年間、雨が一滴も降らなくても困らないという「雨の主人公」としての農業をつくり上げています。共和国の水利・灌漑の全体については本誌三四卷三号「チュチェ農政の展開について」で紹介したのでここでは今回みてきたテソン湖についてだけのおこよう。

八月二十九日、私たちはテソン（大成）湖をみた。この人造湖はキアン灌漑地区の主要な貯水湖で、金日成主席の五回の現地指導のもとに一年八カ月をかけ、一九五九年四月三〇日に完成した。テソン湖は山の高地にあり、もとは雑草が生い茂り、周辺の農地では一ヘクタール当たり一トンのイネしかできなかったところであるが、現在では七〜九

トンの収穫がこのテソン湖の水によってもたらされるようになった。

テソン湖は大同江の水を電力によって二段階で引き上げて貯水している。第一段階ではポンプ一〇台で二三トン／秒の水を一三メートルの高さに引き上げ、一〇キロメートル離れたポンプ場で二二トン／秒で四七メートルの高さへ引き上げ、四キロ離れたテソン湖へ貯水する。吸水管は四本あり、直径一・五メートルのが二本、一・八メートルのが二本で、ポンプ一台の出力は三三〇kw時である。貯水量は一億二千万トンである。結局、大同江の水を六〇メートル引き上げてつくられた人造湖で、貯水の出口は二つあり、水路の長さは一六〇〇キロ、一〇四カ所の貯水池、七三〇〇のポンプ所をもっており、七つの郡、一〇九の協同農場、六万ヘクタールの耕地に水を入れている。

雨季に備えた排水装置もあり、またキアンと平南は順環式となって相互に水量が調節できる。本誌で以前紹介した平南の延豊湖の水は大同江の水を四キロのトンネルを通して汲みとっており、水門をあけると、田圃をうるおしながら、キヤンの灌漑にはいる。

テソン湖には、もと四つの部落があり、小川が流れていたが、そこに二キロのダムをつくり、水を貯蔵した。現在西海岸一帯の工場用水、飲水として役立っているほか、二つの排水口に発電所があり、休養所も五つある。また夏はボート遊び、つり、水泳、冬にはスケートなどが行なわれている。大きさは周辺四〇キロ、総面積一四〇〇ヘクタール、水深三五メートルである。

昔、植棒で水をため、イネをわずかながらつくっていた土地が、現在は、水の心配もなく、周辺は全部豊かな農地となり、イネ、トウモロコシ、シエなどを耕作している。

(3) クムソントラクター工場

チュチュエ思想の具現としての朝鮮における自立的民族経済の建設と発展

共和国の工業は農業を援助する上で大きな任務を果している。

一九八〇年八月二十七日、金星(クムソン)トラクター工場を見学した。ここは共和国屈指の近代的トラクター生産基地の一つであるが、副支配人の説明によると、昔は小さな工場がここにあり、停戦直後、手鋏や鎌のような簡単な農具しか制作していなかった。それが現在では年間二万台の各種トラクターを生産している。

一九五四年九月、主席は爆撃で破壊された当工場を農機具工場として出発するよう指導、脱穀機、除草機など約四〇種類の農機具を生産するようになったが、一九五八年一〇月、農村の協同化が完成したのを契機に、トラクターを農村へ送れ! という農村の機械化による農業労働の軽減の必要に因應するため、全くの自力でトラクターを製作する任務を与えられた。既製品を買う金もないし、またそれではほんとうの自立はできない。しかし図面一枚もない。そこで戦時の古いトラクターを分解し、一つ一つの部品の図面をかって、四〇回以上もの度重なる失敗にも負けず、二〇〇〇余の部品を製作し、三五日間、昼夜を働きぬいて、ついにトラクター「チョンリマ」(二八馬力)第一号を生産した。試運転をしたら前進せず、バックしたことも無い出となっている。一九五八年十一月十四日、平壤に運転してゆき、主席に成功を報告したが、主席はトラクターに直接手をふれ、「また一つの技術神秘主義をわが国の労働者が打ち破った」とのべ、「千里馬号と名付けましょう」といわれた。こうして一九五九年の一年間を準備期間とし、六〇年に約三〇〇〇台のトラクターを生産、六三年からキャタピラ式で七五馬力の豊年号を生産するようになった。一九七一年の十一月には、主席の現地指導があり、この工場の大規模近代化の出發となった。そして一年余で五五〇〇平方メートルの加工組立職場その他をつくり、一九七三年九月二十七日の操業式には主席は直接式に参加したが工場側はこれを記念して、毎年七月二十七日を農村援助の日とし、この工場の誕生日としている。

自らの技術と設計、国内の資材によるこの工場は、一〇〇近くの加工自動ラインと組立ライン、教千台の自動化、半自動化の工作機械、近代的な立体式資材倉庫、工業テレビジョン化と有線無線による総合的生産指揮体系、自動化された鑄鋼、鍛造、熱処理職場など、そのすべての機能で、農民を骨の折れる労働から解放する責務を果している。また当工場の厚生施設、託児所、病院、夜間休養所、夜間工業大学は、何の心配もなく、安心して働き生活できる配慮を労働者に与えている。まさに「百聞は一見にしかず」である。

四、社会主義経済建設においてチュチュエ思想の果す役割

人民経済のチュチュエ化、全社会のチュチュエ思想化は、朝鮮労働党第六回大会での金日成総書記の報告で、終始強調されたが、私の二度の訪朝においても、チュチュエ思想の学習・討論が重要な役割をもった。

今回の訪朝でも私たちは、あらゆる機会に、この問題にふれざるを得なかったのであるが、そのなかでも、とくに最高人民会議常設会議々長ホアン・ツァン・ヨブ（黄長燁）氏と朝鮮社会科学者協会中央委員会副委員長リ・ジス（李地球）氏から、それぞれ有益な挨拶と講義をうけ、また金佑鐘先生からも種々のお話をきくことができた。以下李副委員長と黄議長の講義の要旨（文責は井上）を紹介しよう。

氏の発言は大意以下の通りであった。

哲学の基本点は人間を中心にし、人間の運命を改善変革することつまりよりよい社会をつくることを中心としなくてはならない。人間の生活をみると、誰もがしがあわせ、豊か、長生きを願っている。これを解決するために様々の世界観が生まれた。或る人は神に頼ったが、結局は人間は人間の力に頼る以外にはなかった。昔は病人は宗教に頼った

が、今は病院に頼る。人民自身の幸福は人民がそれを実現しなくてはならない。しかしこれは一人では実現できない。これが現実であり、この現実を解決するのがチュチュエ思想である。だから人間の運命を開拓するのに寄与する世界観が一番大切である。いろいろな世界観があるが、それを分けてみると、人間の外から人間の運命を決定する世界観ともう一つは人間の運命を決定するのは人間自身にあるという思想である。この思想のなかにもいろいろの説がある。或る人びとは、不幸を不幸に思わない、という観念によって精神的安定を得ようとする。しかし人間は世界との関係のなかにあり、世界の中に生きているのであって観念の中に生きているのではない。チュチュエ思想は、世界と人間の関係、いいかえれば世界における人間の地位と役割を明かにする哲学である。

従来の哲学では究極的範疇として物質と意識をあげた。物質と意識という二つの範疇で世界のすべてを包含できるからである。しかし、これは自然と人間といっても同じであろう。

チュチュエ思想では世界における人間の地位と役割が中心となる。ではなぜ、世界における人間の地位と役割が中心なのか。世界観とは世界に対する見解をいう。したがって、世界とは何かについて解答を与えなくてはならない。世界の本質的特徴は何か。世界は歴史的に変化発展してきた。人間発生前は自然だけである。そのときは当然世界は自然発生的に発展したのである。しかしそのご自然が進化発展するにつれて、世界の面貌とその特徴は変化した。自然と社会という構成へである。そして世異の運動というとき、自然発生的運動とともに社会の目的意識的運動が加わった。両者は並立するのではなく、人間社会が自然を改造する側面が次第にその比重を増大した。

人間は世異を改造・支配するようになる。こうして人間は世界で主人の地位を占め、世界を変化発展させてゆく。だから人間が世界で主人の地位を占めているのが現実社会の本質と特徴であるといえる。世界が物質からなり、変化

發展していくというのも重要な特徴であるが、それは人間の発生前もそうであり、以後もそうである。このことは普遍的な真理ではあるが、人間が発生してからの現実的特徴は把握されていない。だから人間の世界に占める地位と役割をはっきりさせることが極めて重要であり、人間が自己の運命を切り開くという点からもこの認識は重要である。人間が世界とは何か、と問いかけるのは、自己の運命をどのように理解し、どう切り拓くかという問題意識のためである。人間が世界に何の影響も与えないなら、世界観は無用である。人間は世界を離れては生きてゆけない存在であり、世界との関係のなかで規定されている。人間が世界のなかでもっとも進んだ存在なので、人間が指導的位置に立っている。

自主性・創造性をもっている人間が、世界との関係をもつ。人間が世界に従属しているのか、人間以外の物が世界の主人になっているのか。

もし人間が主人となっているなら、人間は主人としての自覚をもつようになる。また人間は自己の力が決定的影響力をもっていると思うなら、そのようになる。人間が世界で占める地位と役割を正しく理解したことが、世界観の根本問題を解決する正しい立場である。

- (1) 世界とは何か、世界の一般的特徴は何か、
- (2) 人間とは何か、人間の本質的特徴は何か、

この二つの問題が解明されたのち

- (3) 人間の世界で占める地位と役割が明かとなる。

(1)については、先行哲学で比較的正しく解決されている。世界は物質よりできており、変化發展する。(2)について

チュチェ思想の具現としての朝鮮における自立的民族経済の建設と發展

は、敬愛する金日成主席がはじめて明かにした。先行哲学でも物質と運動は切り離せないといっている。人間は最も発展した物質である。人間が労働を通して発達してきたのは事実である。しかし、存在↓運動という思考方式唯物論↓弁証法という考えだけでは人間の本質を解明することはできない。

人間の労働は目的・意識的行動である。活動する前に一定の目的・意識をもって活動した。動物と区別されるのは労働であるが、人間はどのような性質をもつことによって労働するのかという点の認識が重要な問題である。

労働だけを見てはいけない。労働以外に人間が他の動物と区別される性質は沢山ある。人間は過去の長い変化・発展の結果生まれた。すなわち無機物質↓生命物質↓人間への発展である。

とくに人類と他の存在との共通性と差別性をあきらかにしなければならない。

人間と無機物質、生命体と無生命体との共通性と差別性は何か。まず生命物質の特徴は何か。生命は物質ではなく、物質の性質である。生命をみることはできず、その活動をみることができただけである。生命とは生命力である。人間はその生命力を有効に使う。生命力は生きてゆくことを要求する。生きてゆくとする要求と生活力、これが生命の本質的特徴である。無機物は、生きようとせず、例えばこわれても、捨てられてもいる。生命物質は生きてゆくとするし、生きている。このような生命物質の長期の発展のなかで人間が生まれた。

では動物と人間との差別性と共通性は何か。共通性は生命をもっているということである。生きてゆくという要求と、生活力をもっていることは共通である。ではその差別性は何かというところ、両者には発展水準の差がある。動物は環境に順応して生きている。つまり自然に対して受動的に生きている。動物は食べさせ、繁殖させればそれでよい。野生動物も基本的には食べさせてやればやがて順応する。

しかし人間は環境に受動的に順応するだけでなく、環境を支配して生きようとする。人間は他に隷属して生きようとはしない。いまや人間は他国や他人に隷属して生きることがを願はない。他のものの支配を排除して生きようとすることは主人となることである。主人として生きることが自主的要求という。

人間はこのような自主的要求において質的に他の動物と違う。人間には自然を改造して生きてゆける精神的、肉体的能力がある。この二つの能力は統一されている。両者が分離されるなら、人間は何も改造できない。

人間の精神的力と物質的力が統一して作用して、はじめて創造的能力となる。

以上の点で人間は動物と質的にちがう。正に人間は自主性・創造性をもつ社会的存在である。

人間の生活的要求は様々である。経済的要求、自然を改造しようとする要求、平等への要求、政治的要求、学ぼうとする要求(創造的能力の育成)、病気をなくそうとする要求、国家はその独立を要求し、民族はその解放を要求する。これらすべての要求は主人として、自主的に生きようとする要求であり、意識を通じての要求である。人間の思想・意識は人間の生活的要求を反映している。

反動的要求は反動であり、先進的階級的要求は先進的である。

人間は思想的に覚醒すればする程、高い要求を提出する。自主的要求の高い人は自主的意識の高い人である。

このように第一に人間は自主性と創造性をもっている点で動物と区別される。

第二に人間は社会的存在であるという点で動物と区別される。人間が社会的存在であるというのは、自主性と創造性をもって、社会的に生きているという存在だということである。社会的性質をもつようにならなければ社会的存在ではない。動物のもっている能力は動物の躰だけについている。遺伝によってのみ伝えられる。勿論人間も能力を躰

につけており遺傳する。しかし人間は外部にも能力をもつ。言語、文字、書物などによって、精神的能力を客観化して使っている。機械などもそうである。このように能力を客観化して使用するところに動物との差がある。かくて人間の知識を集合し、高めることができ、他の人とともにそれらの知識を共同的に利用できる。

動物も本能をもって生まれるが、経験によつてもその能力を高める。しかし動物はそれを客観化できない。したがつて動物には發展はない。しかし人間は能力を無制限に客観化し、代々引き続いて利用できる。人類は過去の創造した知識、技術を受け継ぐが故に自主的、創造的人間になる。

人間は社会的に協力し合つてこそ、よりよく生きられることを知っていたが、どのように協力するのが一番よいことかは知らなかった。資本主義社会も社会主義社会も人類が長い間かかつて獲得したものである。

人間を約三〇年も無人間環境で育てると、人間の生活は出来ない、といわれている。

人間のもっている能力は社会的・歴史的に發展してきた集団的能力である。もちろん個人も能力をもっているが、それは社会の一メンバーとしてもっている能力で、社会から孤立してはその能力をもつことも發揮することもできない。

人間が自主性と創造性をもっている社会的存在であるというのは、人間の自主性と創造性が超歴史的・超社会的なことを意味するものではない。自主性と創造性も社会的に發展する。当初は人間と動物と区別されていなかった。しかし人間は労働するのに適格な性質をもつようになった。これが人間が労働するための生物学的基礎になった。他の動物より人間動物のほうが脳髓が発達していた。しかし人間の能力が社会的に結合されなかつたら今日の人間にはない。動物も初歩的に偶然的に協力する。人間も最初はそうであったが、やがて、人間の協力は本格的になつ

た。人間が協力するためには人間たちは同一目標をもたねばならない。また考えを外部に表現できなくてはならない。ここに言語が必要となる。

このように人間の生活力は発展する。それがわれわれの知識である。

労働が先か、自主性創造性が先にあったのか。

先行哲学は労働は目的、意識的活動であると正しく指摘していった。蜂の巣は本能的につくられたものであるが、下手な大工より精巧である。しかしそれは前もって目的意識的につくられたものではない。人間は低い水準ではあっても目的意識的に労働する。ところで人間が労働するためには労働のできる人間が準備されていなければ、労働はできない。物質と運動は分離できないので、この両者を機械的に分離してはならない。労働によって人間性も変化する。物質はその性質によってのみ運動する。

土台と上部構造について次に考えよう。

従来の見解は労働、生産、経済問題を社会生活の基礎として考えた。たしかにそうである。しかし、生産、労働のできる資質を人間がもっていたからそのような行為ができるのである。したがって、人間の文化資質の発展度を考えなければならぬ。労働が社会的行為であったことも正しいが、それは多くの人々が同じ目的で共同活動ができたからである。それが現在の政治である。

経済と政治、労働と意識、どちらが先後ではなく、同時に生まれたものである。

両者は相互的側面をもっているが、しかし生産力の担い手である人間の意識が決定的役割をもつ。彼らは長い歴史の中で労働者階級として結集し、そのなから指導者が労働者階級の党をつくり、そのまわりに人民大衆を結集して

強力な力量をつくりあげ、人民の政権をつくり上げ、社会主義経済制度をつくりあげた。これは厳然たる事実である。

したがって下部構造によって上部構造が全面的に規定されると考えるのは正しくない。両者を区別することは、それ自体正しいのであるが。

人間は経済だけでなく文化的・政治的意識をも反映する。

所有権も行政によって認められる。経済の発展も政治による。政治は経済より上の地位を占めている。上部構造は土台より上の地位を占めている。

大約以上のようなり副委員長の説明には、筆者の理解の未熟さもあり、なお検討の余地があるが、チュチェ思想の性格を理解するための多くの論点が提供されているといえよう。

次にホアン最高人民会議常設会議長の私たちへの挨拶を紹介しよう。議長はこのなかで、指導者と大衆の問題と朝鮮における思想の自由についての問題についてのべたがそれは、極めて重要な問題であり、私は強い感銘をうけた。

とくに日本では、金日成主席の後継者問題に関心が集中しており、また一部社会主義国のイメージ・ダウン現象もあって、権力と人民の自由の問題には関心が寄せられている。

この指導者の権力と大衆の問題について、国際チュチェ思想研究所理事長であった故安井郁教授はかつて次のようにのべていた。

「この共和国の社会主義体制における政治の在り方がまた非常な特色をもっています。それは抑圧的な権力政治で

は全くなく、稀に見る温かい慈愛の政治であります。

マルクス主義者以外でわたくしが深い関心をもつ社会学者のひとりであるマックス・ウェーバーは、晩年の講演である『職業としての政治』のなかで、『政治とは、国家間であらうと、国家内の国家に含まれる人間集団であらうと、権力に参加しようとする努力、あるいは、権力に影響を及ぼそうとする努力である』と定義し、政治に関係する人間、つまり権力に関係をもつ人間は、『悪魔と契約を結ぶもの』であると述べています。ここから権力の批判や権力への抵抗の問題が生じますが、政治が人間の生活にとって欠くことのできないものである以上、単に批判と抵抗だけで問題は終わらず、権力の内容とその行使の態様をいかにして正しいものとするかという問題や、権力を掌握する組織をいかにして民主的なものにするかという問題をも、突き詰めて考えざるをえません。

レーニンもこの問題について苦悩し、死の床についてからでさえ努力をめざす、最後まで精根をかたむけつくしました。モツシェ・レヴィンの『レーニンの最後の闘争』という本はその一面を描いて、人々に深い感動を与えています。しかし、残念ながら、レーニンの努力は充分に実をむすぶにはいたりませんでした。

この政治と権力の在り方というきわめて困難な問題の最高の解決を共和国で見出すことができたのは、わたしの大きな喜びであります(『朝鮮革命と人間解放』、雄山閣、一九八〇年一月、一二二ページ)

右で安井教授は「温かい慈愛の政治」といういわば情動的な表現をされているが、政治と権力、または大衆と指導者の問題については、「温かい慈愛」の内容をより理論的に明かにする必要がある。この点についてホアン議長は一九八〇年八月二八日、人民文化宮殿で、以下のように私たちに説明された。

人間の本性は社会とともに変る、と先行哲学は教えた。この考えは人間の本性を観念的に神とか理性とか生物学的

特性に求めていたそれ以前の考えにくらべて進歩的であった。

しかし社会そのものの変化を起こすのも、やはり人間であり、人間が自主性を求め、創造性を發揮することが社会変化の基本である。

したがって、われわれは、どのような社会制度をとり、どのように生活すべきかは、それぞれの人民が決定すべきであり、その上で他の国と親善協調できる信念をもっており、チュチュエ思想の現実化は各国でことなるが、チュチュエの理念は世界共通のものであると考える。そして敬愛する主席のチュチュエ思想はわが国の歴史的・社会的諸条件にあわせて具現されたものであり、すべての勤労者が、わが国と社会の主人となっているのである。わが国の参謀本部は朝鮮労働党中央委員会であり、それを指導する方は偉大なる金日成主席であり、その指導思想はチュチュエ思想である。

わが国ですべての人の自主性を實現するためには、すべての人が主席のまわりに団結し、すべての人々がチュチュエ思想で武装しなければならない。敬愛する主席の唯一思想であるチュチュエ思想で武装し、唯一の党である朝鮮労働党のもとに全人民が結集したとき、わが国でのチュチュエを全面的に實現できる。

わが国には誰一人例外的な特権者は存在しない。職責によって自動車にのっている人もいるが、しかし政治生活では全く平等である。

例えどんな人でも、専横や、官僚制におちいるなら、その人は長つづきしない。わが国では二重規律は許されない。人間だから違反者が例外的にいるかも知れない。しかし自信をもっていないといえる。

われわれは自己の力を最大限に發揮しなければならない。しかし人間は孤立しては力を發揮できない。人間の

肉体の場合でも、手と足がバラバラではダメであり、頭脳によって統一的に働くことが必要である。人民大衆の力を發揮する場合も党と偉大なる領袖の唯一的指導があつてはじめて可能となる。

この問題でもチュチェ思想は新しい見解をとっている。つまり傑出した個人と人民大衆の役割の問題についての考へ方である。これまでの考へは、例えばニュートン、ベートーベン、チャイコフスキーなど傑出した天才的個人がいたが、しかし結局は彼らより人民大衆が傑出したのだと説明されていた。つまり労働大衆はある分野での偉大な個人よりもその役割が大きい、とみられていた。

しかし人民大衆とその指導者の関係についてはそうではない。人民大衆と指導者は、その利害関係を全く同じくする関係である。領袖は大衆の利害関係を綜合して擁護するところの任務をもつ特殊な、人の脳髓と同じ役割を果す人である。脳髓は分散、分裂してはならない。脳髓が分裂したら、人間は精神分裂症となってしまう。中心は一つでなければならず、領導は唯一性が保証されなくてはならない。領袖の指導の下に、党を中心として、全人民が組織化されなくてはならない。したがって領袖の打ち出す方針は、党中央の方針であり、それは全人民大衆の要求である。人民大衆の要求と党中央の方針と領袖の方針は、したがって全く一致している。だから大衆を指導する個人を傑出した個人とはみない。党と人民大衆を代表するとみる。われわれは、個人と個人との間で義理はあるとしても、忠誠心はない。忠誠心は個人にはなく集団、全体に対してのものである。われわれは党に対して忠誠心をもつ。なぜなら党が全人民を代表するからである。われわれは領袖にたいする忠誠を語る。なぜなら領袖が党と人民を代表するからである。われわれは領袖と大衆を一つとみる。このようなとき、その社会は、そこに住む人民の本性を發揮できる社会であるとみる。

敬愛する主席は抗日戦の当初から革命と人民のためにそのすべてを捧げられた。その歴史的闘争過程で、全人民の真の利益の擁護者として認められた。だからこそ、主席を全人民は唯一の指導者として認めたのである。こうして人民が一つに組織化され、一つのチュチュエ思想、一つの領導でみちびかれ、わが国の人民は倅せな生活を送っている。一人一人が主人として自己の力を發揮している。わが国はまだ発展途上国である。しかし、わが国の今日までの発展の成果、倅せで誇らしい生活の源泉、その秘訣は、唯一の領導体系をもち、皆が主人としての生活を送っているところにある。

次で黄長燁議長は共和国での思想の自由についてふれ、次のようにのべた。

唯一の思想というと、自由があるのか、という人もあろう。しかし、われわれは、思想とは人民の要求、利益、その実現のための方途を反映したものと考えている。人民の利益、その方途については論争し、本も書く。この意味で自由は完全に保証されている。

人民の利益に反する行動には、自由はない。われわれは人民の利益をはかるために力を合わせて研究している。これこそがチュチュエ的研究であり、その学習である。チュチュエ思想を理論的に研究し、実践し、発展させることこそ真の自由である。

私にとって、以上の説明は、大衆と指導者、共和国での自由についての納得できる明快な解説であった。指導者は大衆の利益・願望の具現者であり、具現者である限り指導者であり、指導者と人民大衆は一体であること、真の自由とは人民の幸福に役立つことの自由であって、人民の幸福を妨げることには自由はありえないこと、これらのことは極めて当然でなければならぬ。そして真の指導者には人民の利益を総括し、人民の敵と闘って勝つ知力と体力と献

身性がなくてはならず、ただ人民へ奉仕したいという願望をもつだけではその資格がないことも自明である。金日成主席は五十余年の革命闘争と建設指導のなかで朝鮮人民の太陽であることを事実によって立証した。その輝かしい成果を主席は第六回大会報告で次のようにのべている。

「わが国の社会主義制度は、勤労人民大衆があらゆるもの主人となっており、社会のすべてが勤労人民大衆のために奉仕する、もつともすぐれた社会制度であります。こんにちわが国では、勤労人民大衆に国家と社会の主人としての自由と権利が全面的に保障されており、社会のすべての富が勤労人民大衆の福祉増進に充てられています。

わが国では、国家のあらゆる政策が勤労人民大衆の意思と利益に合うよう実施されており、わが国の勤労者は国家と社会の主人として社会政治活動のあらゆる自由と権利を十分に行使しています。

わが国では国家が責任をもつて全人民に衣食住に必要なあらゆる物質的条件を保障しています。わが国の勤労者はみな能力に合った職場をもっており、国家から安全な労働条件と十分な休息条件を保障されています。わが国では歴史的に受けつがれてきた租税制度が完全に廃止されることにより、人民が税負担から永遠に解放され、社会の富が増えるにつれて人民の物質、文化生活が系統的に高まっています。わが人民は無償治療制と無料教育制の恩恵によって、誰もがみな一銭の金も使わずに治療をうけており、心ゆくまで学んでいます。

実にこんにちわが人民は、国家と社会の主人としての自由と権利を心ゆくまで行使しており、何の心配もなくみな同じようによい暮らしをしています。

わが人民は、実生活をとおしてわが国の国家社会制度こそが勤労人民大衆に真の自由と権利を保障し、幸福な物質、文化生活を営めるもつともすぐれた制度であることを深く確信しています。わが人民は、わが国の国家社会制度

の強化発展により幸せな未来を展望しており、この制度をいっそう強化発展させるために力強くたたかう固い決意にみちています。」

何という素晴らしい全世界へ向っての宣言であろうか。そして私の二度の訪朝の結論は、右の宣言が文字通り共和国で実現されつつある現実であるということである。

訪朝以前における私の共和国理解は、極めて乏しいものであった。したがって私の共和国紹介をよんでも共和国の現実にふれたことのない人はその素晴らしさに疑問をもつ人もすくなくないであろう。以前の私自身がそうであった。しかし現在の心境は本文の通りであり、また朝鮮問題は、実は日本の問題であると考えている。朝鮮問題の正しい解決、すなわち朝鮮の自主的平和統一（高麗民主連邦共和国の樹立）なくして、アジアと世界の平和はありえないのである。（一九八〇年十一月）